



1

発災直後、震度5クラスの余震も続く中、全国各地からボランティアが駆けつけ、直接避難所などを訪れては、「大丈夫ですか」「何かお手伝いすることはありますか」と避難者に声を掛けてまわっていました。

4月21日、町社会福祉協議会により「益城町災害ボランティアセンター」が組織されると、ボランティアのスムーズな受け入れとマッチングが行われ、より効率的なボランティア活動が行われるようになりました。

連日、早朝から大勢のボランティアが受付会場の井関熊本製作所グラウンドに集まり、依頼者のもとへ振り分けられました。ゴールデンウィークには依頼数をはるかに上回るボランティアが集まると想定され、募集対象を県内在住の人に限定することもありました。



2

①益城町災害ボランティアセンターに続々と集まるボランティアとマッチングを行う職員
②地震により破壊された擁壁を解体するボランティア

依頼内容は、避難所支援や物資の仕分け作業、災害がれきの片づけ・運搬など多岐にわたります。

ボランティアは、宿泊費や交通費など、すべてが自己負担ですが、現在でも多くの人たちが継続して活動しています。

雨の日も風の日も、そしてうだるような夏の暑い日でも駆けつけてくれた皆さんの顔を忘れることはできません。

ボランティア活動を振り返って



味楽ふくしま
ふくしまさとし
福島悟さん

4月19日～20日に避難所となっていた広安小学校に炊き出しに行きました。その時、震災後初めて益城町を訪れ、街並みが様変わりしてしまっていたことに大きな衝撃を受けました。広安小学校では、避難している小中高校生が率先して手伝いをしてくれて非常に感銘を受けました。

その後、散乱する店内を片づけ、4月21日にお店を再開しました。日常生活を取り戻しつつある中、ふと益城町に目を向けると、そこにはいまだ多くの人々が避難生活を送っていました。何か自分に出来ることはないかと思い、6月1日～8月19日まできらめき館や津森分館などにお弁当を届ける活動を行いました。

今回振り返って、私自身、人との縁は何物にも代えがたいものと改めて実感しました。益城町の皆さん、気候もこれから寒くなってきます。体に気をつけてお過ごしください。

―― 衝撃に差し伸べられる手 ―

「大丈夫ですか」

集結する善意の声